

七  
法花經の品を読む人を咎りて現に口喎斜み悪しき報を  
得る縁 第十九

昔山背国に一の自度有り。姓名詳ならず。常に碁を作つことを宗とす。沙  
弥白衣と俱に碁を作つ時に、乞ふ者来りて法花經の品を読みて物を乞ふ。沙弥  
聞きて輕り咲ひ咎りて、故に己が口を俛らしめて音を訛りて効び読む。白衣聞  
きて、碁の条に恐りて曰はく「畏恐し」といふ。白衣は碁を作つ遍ごとに勝つ。  
沙弥は遍ごとに負く。是に即坐沙弥口喎斜みて、葉をもちて治療えしむれ  
ども終に直らず。法花經に云はく「もし輕り咲ふ者有らば、当に世々に牙齒  
疎に缺け、唇醜く鼻平み、手脚繚戻りて、眼目角睐ならむ」とのたまふは、  
其れ斯れを謂ふなり。むしろ悪しき鬼託きて多く濫言すとも、經を持つ者を  
誹謗るべからず。能く口業を護るべし。

第十九縁 惡業についての現報説話。三宝  
繪・法九に引用。三宝繪より本朝法華驗記・  
下・九十六に書承。今昔物語集・十四ノ二十八  
に類話。

七 妙法蓮華經の品名を列挙読誦するか。八底  
本訓釈「咎(阿佐毛利)」。九底本訓釈「喎斜(上  
音過反、下耶反、二合、由加三天)」。妙法蓮華  
經・隨喜功德品に口に關して「亦不喎斜」とみ  
え、仏本行集經・二十六に「或口喎斜」とあるな  
ど、口に關してのゆがみの表現。一〇 自度の沙

弥。私度僧。「度」は出家する意。「自度」は私度  
とも。官の許可を得ずに出家すること。僧尼の  
公驗(証明書)は養老四年(七三〇)よりおこなわれ  
た、とされる(続紀)が、それ以後では公驗の有  
無が官度と私度自度とを区別する基準であらう。  
本説話がいつの時代に設定されているのかは不  
明である。課役をのがれるために浮浪し乞食す  
る僧は多かった。これらの私度僧たちを、本書  
は隱身の聖とらえている。本書を益田勝実は  
私度僧の信仰のあかしの文学とする。二底本  
訓釈「故(己止左良二)」。三 ねじ曲げさせて。  
底本訓釈「候(毛刀良奈之天波利天)」は多くの誤  
写を含む。三 なままって。四 まねて読む。底  
本訓釈「効(万爾(彌)か)比」。五 原文「碁条」は、  
碁石を一目置くごとに、の意であらうが、「条」  
のこのような用法は見出しがたい。六 底本訓  
釈「負(保須)」は誤釈。七 中卷十八縁、下卷二  
十縁の「口喎斜」にイメージが結びついている。  
八 妙法蓮華經・普賢菩薩勸発品。九 底本訓釈  
「疎(於呂曾可爾)」。一〇 底本訓釈「繚戻(上  
か)礼于反、下来反、二合、毛止利天」。一  
三 底本訓釈「角睐(角睐か)下七反(膝とあやま  
って音が付されている)、二合、須可爾」。一  
三 原文「而与持經者、不可誹謗」。「与」  
は、一を、の意。